

装飾古墳の変遷と意義

靈魂観の成立をめぐる

Changes and the Significance of Decorated Kofun :
The Formation of the Concept of Spirits

広瀬和雄

HIROSE Kazuo

はじめに

- ①装飾古墳の研究史
- ②装飾古墳の諸段階
- ③靈魂観の成立

おわりに

【論文要旨】

5世紀から7世紀にかけての古墳時代中・後期には、福岡県や熊本県を中心に佐賀県や大分県などもふくめた北・中部九州で、数多くの装飾古墳がつけられた。それは、遺骸を安置した石棺や石障、それらを内蔵した横穴式石室や横穴墓に、絵画や文様を描くものであった。やがて、それらは7世紀をつうじて山陰、近畿、関東、東北などの各地域にひろがっていく。

装飾古墳に描出された絵画や文様は、おおむね5世紀では直弧文や鏡や武器、それらが形式化した連続三角文や同心円文に、盾や靴などが加わるものであった。つぎの6世紀になると、それらに船や人物や馬などの具象画が付加される。そして描画の方法も、最初は立体感を出そうとした浮き彫りであった。ついで線刻で描かれるようになり、最盛期にはカラフルな色彩観にあふれた彩画へと移行する。

そうした図文に通底するのは遺骸を辟邪するための観念であったが、6世紀になって霊肉分離の観念がそこに付加される。それとともに、船や馬で運ばれてきた死者の靈魂が、横穴式石室のなかで辟邪されつづけるとの共同の心性が形づくられていく。6～7世紀をつうじて、横穴式石室は靈魂の住みかとして機能したのである。いいかえれば、古墳そのものが日常世界のなかの他界であったわけだ。それは属人的で、往還可能な、聖なる空間であった。

【キーワード】 辟邪、霊肉分離の観念、海上他界観、横穴式石室、前方後円墳の変容